

才能教育
143号 (2003冬)



「子供と音楽」

——ベルリン国際シンポジウムに出席して

才能教育研究会常務理事

中嶋 嶺雄

(国際社会学者)

1 印象深いドイツへの旅

ベルリンの秋は、かなり冷え込むけれど、それだけに紅葉が鮮やかで美しい。紅が映える信濃路とは違って、黄褐色が主調だ。そのベルリンの閑静な一角に日独センターがある。東西交流の場として様々な文化的・学術的な催しが行われ、広く世界に知られているが、私はたまたま一昨秋と昨秋、二年続けて同センターの国際シンポジウムに招かれた。一昨年のテーマは「高等教育と大学」だったが、昨年は「東

と西」シリーズの一環としての「子供と音楽」というユニークなもので、十月二十四、二十五の両日にわたり延べ八十名前後の参加者によって開催された。才能教育研究会からは豊田耕児会長と私が参加した。

このシンポジウムのためのスズキ・メソッドの子供たち十名による演奏（第一目の夕刻）も大変に好評で、その水準の高さが、シンポジウム参加者に多大の感銘を与えたものと思われる。豊田会長の新しい構想と厳しい練習の積み重ねにより、今回は台奏と独

奏が中心で、バッハの二つのヴァイオリンのための協奏曲に始まり、モーツアルトのディヴェルティメント百三十六番で終わるアンサンブルのあいだには、ベートーヴェンのピアノ三重奏曲第一番が組み込まれていた。

ベルリンへの途次、私たちは、成田からフランクフルト到着後、バスで三時間もかけてチェコ国境に近いホーフ（HOF）という小さな美しい町を訪れたが、そこにはスズキ・メソッドで教える立派な音楽学校があり、六十名のドイツの子供たちとのキラキラ星変

奏曲の合奏を含むスズキ・チルドレンの演奏は、約三百名の市民から大きな喝采を浴びた。

ホーフの音楽学校は、この町にあるオーケストラ（Hofer Symphoniker、団長は町の議員も兼ねるW・アントン氏）の付属学校のかたちをとっているが、大変立派な施設で、スズキ・メソッドで学ぶヴァイオリンやチェロのレッスンも見学することができた。



国際シンポジウムでの演奏

2 有意義な国際的討論

二日間にわたる国際シンポジウムは日・独・英の立派な同時通訳付で、ドイツや日本をはじめアメリカ、ハンガリー、オーストリアから幼児教育の専門家や音楽教師も参加して熱心な討論が展開された。

第一日目の豊田耕児会長による導入講演は、「才能は生まれるものである」という鈴木鎮一先生の哲学に言及しつつ、「音楽的でない子供はいません」との立場から、ゲーテの世界にも触れて、「音楽は世界を救う」というパブロ・カザルスが四百人のスズキ・メソッドの子供たちの演奏を聴いたときに発した言葉を紹介した格調高いものであった。

二日間の会議では、初日に、「スズキ・メソッド——音楽と幼児教育およびその普遍性」と題した私の基調報告、次いで「音楽がスズキ学齢前児童

スクールで、どんな違いをもたらしたか」というアメリカのヴェテラン教師スーザン・グリリさんの報告、さらにドイツで才能教育運動をリードするケルスティン・ヴァルトベルクさんの報告「ドイツにおけるスズキ・メソッド」という三本の総論的な報告とそれをめぐる討論があった。

第二日目には、ハンガリーの大作曲家コダーイの理念に基づく音楽教育の実例が、カタリン・キス女史によって紹介されたり、世界的なチェリスト、ヨーヨー・マ氏の実姉でヴァイオリニストであると同時に小児科医でもあるヨーチエン・マ（馬友楽）さんが、ニューヨーク児童オーケストラの実践報告をしたり、ドイツの若い女性の脳生理学者ユーリア・シユベアリンクさんが子供たちの音楽と早期教育の関係性を「乳幼児の脳の順応性」と題して科学的に説明し早期教育の有効性を強調するなど、二日目の各論も大変に有益であった。

3 ベルリンでの一茶論議

このように今回のシンポジウムでの報告も議論もきわめて有意義であったが、先の私の報告に際し、スズキの子供たちは一茶の俳句を朗読するそうだが、その意味するところは何か、といった質問が会場から飛び出したのは印象深かった。私は「ドイツでも、イギリスやフランスでも、子供たちがよく詩を朗読するように、型とリズムのある日本の伝統的な短詩としての俳句の朗読と暗記は、幼児教育としても大切で、鈴木鎮一先生は子供にも親しみやすい一茶の俳句を百句選ばれたのだ」といった返答をしたのだが、まさかベルリンで一茶の俳句の朗読が話題になるうとは、思いもよらないことであつた。

一茶の俳句をめぐるベルリン日独センターでの論議で感心したことは、俳句についての認識のレベルが高いことであつた。出席していたドイツ人女性

の一人は、千代女の有名な句「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」をその箇所だけ日本語で引用して、この句のもつ情景と情緒を英語でうまく説明したのちに、松本に発祥したスズキ・メソッドの子供たちが信濃国の産んだ一茶の俳句を暗誦するのは大変よいことだ、と結論づけていた。



日独センターで豊田会長夫妻と

なつた。

が反対される理由は、才能教育が天才教育だと誤解されかねないことのほかに、「あざやけが よろこばしいかかたつむり」といった一茶の句は、子供には意味不明のかなり不道徳な句だというものであつた。

私は最近、鈴木鎮一先生が子供向けに「一茶百句俳句かるた」をつくられたときの文章と二万句もあるという一茶の句のなかから選ばれた百句を読む機会があつたが、そこにはもとより、鈴木(正)氏が例示しているような句は入っていない。

4 「音楽が世界を救う」

いずれにせよ、今回のベルリンでの二日間の会議では、スズキ・メソッドへの内外の評価やドイツの音楽教育が抱える問題点についても真剣に議論されたのは意味深く、「スズキ・メソッドはなぜ西洋音楽なのか」「中嶋先生はなぜ音楽以外の道を選んだのか」といった鋭い質問には私もタジタジと

同時に、鈴木鎮一先生ゆかりのベルリンで、「音楽を子供のために」「音楽が世界を救う」という共通認識に至ったことは、今回のシンポジウムの大きな収穫であつたといえよう。

最後に、ドイツのヴァルトベルク女史がスズキ・メソッドへのドイツ国内での偏見や批判とにかいたたかっているかに触れつつ、「誰でも参加できる幅広い運動こそスズキ・メソッドではないのか。ゲーテの世界に通ずる子供を育てるのが目的ではないし、今回のテン・チルドレンはスズキのエリートではないのか」と発言していたことに言及しておこう。

これらの発言を含めて、今回のシンポジウムはテン・チルドレンを引率された指導者の先生やお母様方にも是非傍聴してほしかったのだが、スケジュール上の理由からか、その機会がなかったことが惜しまれる。

二日目午後の総括討論は、ドイツのユーリア・シュベアリンク(マックス・プランク芸術振興協会)さんと私が共同議長をつとめた。すると、才能教育研究会の理事もしていたいでいる神戸大学名誉教授の鈴木正幸氏が突然会場に現れ、しばらくして発言を求められ、教育学者の立場から早教育の意義と限界について意見を述べられたのである。

議長として私は胸をなでおろす思いであつたが、ここで鈴木(正)氏が昨日来の一茶論議を蒸し返されるのではないかと大いにハラハラしたものである。というのは、鈴木(正)氏は、スズキ・メソッドの子供たちがグランドコンサートなどで一茶の俳句を朗読することに大いに批判的で、「一茶の俳句を皆で一斉に斉唱させることに強い疑問を感じました」と問題提起し(「才能教育」九十六年夏号、参照)、才能教育研究会の内部で激しい論争になったことがあつたからである。鈴木(正)氏

●図書紹介

「道しるふ」

定価 二、〇〇〇円

本会の理事・教育部長などを歴任された故・山村晶一先生の語録を集めた単行本です。

この語録は、名古屋支部の役員会のお話をまとめたもので、幼児教育や奏法について「才能教育の真髄」とも言える珠玉の言葉が収められています。

座右の書としてお備えになることを、おすすめいたします。

◎才能教育研究会

B6判 上製 一二〇ページ

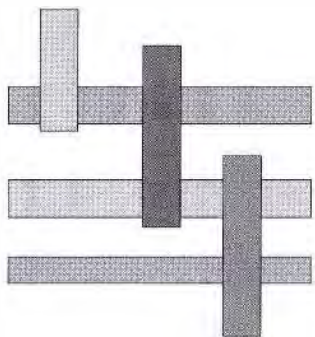
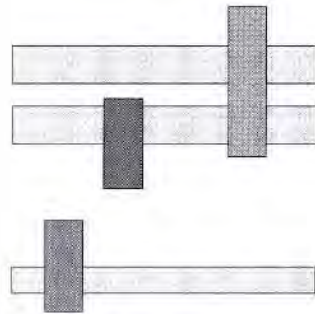
◎才能教育本部・東京・東海の各事務所にあります。

心温まる感動的な旅

—スズキ・チルドレンのドイツ・ツアー—

東海地区ヴァイオリン科指導者

末 広悦子



十月二十日朝、一行二十一名は成田を出発しました。二十二日ホーフ市で行われるドイツ・スズキ・メソードの子供達との合同演奏会、二十四日ベルリン日独センターで行われる「子供と音楽」というシンポジウムでの「スズキ・メソード」のデモンストレーション演奏のためです。

成田から約十二時間後、日付変更線を通して同日二十日午後、フランクフルト空港に到着しました。空港では、ホーフ市からコサキ様（注1）御一家、ヤン様（注2）のお出迎えを受

け、「こちらで少しお休み下さい。入国手続と荷物の受け取りをいたしますから」と貴賓室に案内された時にはアツと驚くと同時に、ドイツでのスズキ・メソードの、そして何より豊田耕児先生御自身の四十年間にわたる足跡の評価の高さを一番に感じさせられました。鈴木鎮一先生は「最初の音を聴けば、その人の演奏はわかる」とおっしゃいましたが、この旅は、素晴らしい「第一音」で始まりました。

●ホーフ市を訪ねて

れたと聞いた事があり、鈴木先生もその昔この町を通過されて、もうすぐベルリンだと思われたのか等と想像しました。

次の日二十一日は、午前中ホールでリハーサルを行い、市庁舎でデラ市長主催の昼食会に招かれ、南ドイツの郷土料理の御接待を受け一同大喜びでした。午後、子供達は市内観光に連れ

て行っていたとき、豊田先生、中嶋雄先生、私の三人はアントン氏の案内でホーフ交響楽団音楽学校を見学させていただきました。アントン氏は、ドイツ・スズキ協会理事長、ホーフ交響楽団長、バイエルン州音楽委員会長という方で、フランクフルト空港到着後、コンサートも含め、三日間のホーフ滞在が本心に心温まるものであったのは、氏の御尽力のお蔭と心より感謝しています。



ホーフでのコンサート

そして何よりこの町で驚いた事は、たった人口五万人の町で、この学校に四歳から十四歳の子供達が千人も通っているという事でした。ここは、普通の学校が終ってから子供達が楽器を学ぶために来るのですから、日本のスズキ・メソードの教室と全く同じ形のもです。スズキ・メソードもこの学校のプログラムの中にあり、約八十人の子供がヴァイオリン、チェロ、ハープ等を学んでいるという事でした。古く、どっしりとした石造りの校舎、

通ってくる子供の数の多さ等、永年培われた文化の違いを感じずにはいられませんでした。

二十二日夕方五時より、フライハイツハレでコンサートが開催されました。このホールはシンブルな近代的な作りの、よく響くホールで、子供達も気持良く演奏出来たようです。ここでのコンサートの様子は、後ろに掲載しましたフランクフルトポスト紙の記事を読みたいだければ、おわかりいただけると思います。ホーフでの三日間は、地元の皆様の人情味溢れる心温まるおもてなしを受け、古き良きドイツを感じ、たった三日間なのに、二十三日朝にはお互い涙を浮かべてお別れいたしました。子供達もお母様方もこの三日間で、すっかりドイツが好きになりました。ワルトアウト鈴木夫人が天国から子供達に、「ドイツは良い所でしょ」とニコニコしながら、得意満面の時に見せられたあの茶目っ気たっぷりの笑顔で微笑んでおら

れるように感じました。

二十三日朝、バスでベルリンへ向け出発し、途中、中嶋先生の御提案でライプツヒのバッハの眠る聖トーマス教会に立寄れた事は、一行にとり、とても嬉しい事でした。

●ベルリンでのコンサート

ベルリンはホーフよりも北(東)に位置するためか、紅葉が一段と鮮やかで、灰色の秋の空と美しい対比をなしていました。落葉でぬれた道と、身の引き締まるような空気の冷たさ、ベルリンは北の都会です。その町の清閑な住宅街の一角にあるベルリン日独センターは、ガラス張りのモダンな建物で、ここでは都会のそれでいて落ちついた美しさを感じました。日独センターでのコンサートがどんな様子であったかは、日独センター副事務総長であられる大木清孝氏からの手紙の一部を御紹介させていただきたいと思えます。



ホーフ市庁舎でのレセプション。左端がデラ市長

実施しておりますが、先月の「子供と音楽」のシンポジウムではその実践としてのコンサートを開催する事により、出席者は、子供達が本当に楽しく演奏する姿を目の前にし、その素晴らしい感動にたしました……」

デモンストレーションの演奏であるからと、最初アンコールはしない予定でしたが、鳴りやまぬ拍手に、フィオッコのアレグロを演奏しました。

このように、ホーフ、ベルリンの二ヶ所の演奏は共に、それぞれの聴衆を魅了するものでした。私はその演奏を舞台の袖で聴きながら、この旅行中垣間見た、お母様方の子供におけいこさせている姿、そしてまた八月以来の豊田先生のリハーサル(レッスン)を想い起していました。どのお母様も実に上手におけいこをさせておられたという事。どの子も集中しておけいこ出来る子であるという事。そして八月以来の豊田先生の適切な御指導で、どんな変化して行った事。鈴木先生の「どの

子も育つ親次第」「どの子も育つ先生次第」「どの子も育つ私次第」

「しっかりとやります。本当です。」正にそれを、それだけを実行した子供達であったと言う事でしよう。つまり才能教育の鈴木先生の理念の根本を実行出来さえすれば、子供達は皆立派に育つという事でしよう。それを日本国外に示せたという事が、今回の演奏旅行の第一の成果であったと思います。

●心地良い空間

そして加えるに、この旅は本当に楽しいものでした。皆お互いを思いやり、毎日を気持ちよく過ごす事が出来ました。中嶋先生は、バスでの移動中など、いつも子供達やお母様の輪の中に入り、何かと気配りをして下さいました。このような心地良い空間をお互いの人間の間に、ひいては人類全体に創り出す事こそ、鈴木先生が最も希まれたい事ではないでしょうか。「誰の心も瑕つつけずまた己れをも」鈴木先生

の、この言葉のような人間を育てる事。それが、スズキ・メソッドの第一の使命ではないかと、改めて思う旅でもあります。

松本・東京・名古屋と、どの会場も満席の中に終了した帰国コンサートの帰り際(十二月二十二日)、一人のお母様が「もつと、この旅行が続いていれば良いのに。これで終わると思うと涙が出ます」と。私も同じ思いでした。そのように感じさせて下さった豊田先生、中嶋先生、ドイツの方々、日本の各地の方々、そして一緒に旅した皆様のお心遣いに心より感謝申し上げます。素晴らしい第一音で始まったこの旅は、やはり最後まで感動的な音楽(旅)でした。

十二月二十四日 クリスマス・イブ。ワルトラウト鈴木夫人の二回目の御命日に。

(注)ご主人はホーフ交響楽団のヴァイオリン奏者、並びにドイツスズキ・メソッド指導者。奥様は日本

人ピアノリストで、スズキ・メソッドで指導しておられ、今回は通訳として大変お世話になりました。

御子息のミカエル君(8歳)もスズキ・メソッドでヴァイオリンを習っています。

(注2) アンントン氏(後述)の秘書。

*

*

(フランクенポスト紙

二〇〇二年十一月二日)

スズキの生徒達の感動の演奏会

「日本の天才児達」

松本の才能教育研究会会長、国際スズキ協会会長の豊田耕児教授の指揮下、スズキの生徒達、「キラキラ星」を合奏。日本スズキ・メソッドの超一級の生徒達十人の登場は、ホーフ・フライハイツハレの聴衆に、実に印象的な、絶対的に稀な音楽会を経験させた。

(ホーフ発)一曲目、鈴木鎮一氏の「キラキラ星」は、全バイエルン州から集まった一〇〇人の生徒と日本からの生徒によって、合同で演奏された。ホーフ交響楽団音楽学校、パンベルク町立音楽学

校、トゥッチングの個人教授の生徒達
は、何日もあわせて練習することなく合
奏することができた。これは聴衆に強い
印象を与え、「スズキ・メソード」が何
であるのかを垣間見させることになっ
た。というのは、スズキの生徒達は世界
中、どの大陸でどの楽器を習っても、同
じ教授法によつて学ぶからだ。

九歳から十五歳のこの日本の子供達の
テクニクは、息をのむ程だ。プロの音
楽家でも全力を尽くさなければならぬ
高度なソロ協奏曲や演奏会用の曲が、と
ても子供とは思えない水準で演奏され
た。レパートリーは、バッハ、モーツァ
ルト、タルティーニ、ベートーヴェン、
メンデルスゾーン、そして日本のわらべ
歌にいたるものだった。ホールの聴衆の
中には、「日本の天才児達」と思い、口
に出したのもいることだろう。

しかし、この日本の少年少女たちが、
ホーフの聴衆の前で喜んで演奏してい
ることは、よく伝わってきた。イントネー
ションと音質のすばらしさに聴衆は感激
し、一曲ごとに熱狂の拍手を送った。こ
の才能あるグループの、たった一人の男

子である日置 駿は、タルティーニの
「コレリリの主題による変奏曲」を奏
し、魅了された聴衆から絶賛された。

ここで体験できたのは、徹底した努力
で才能を最良にのびそうとするスズキ・
メソードの、そのよく構成された教育シ
ステムのたった一角にすぎない。例え
ば、この九歳の少年は、母親の支援のも
とに、日に四十五分ずつ四回練習する
という。彼は、それをかがやく目で語り、
楽しいし誇りに思っているとも言った。
これは、この日本の最高峰の生徒達全員
に共通することで、自分達の能力に喜び
を覚え、この特別の成果に誇りを抱いて
いることを、私たちも強く感じさせられた。

美しい音を 美しい心を

—美しいドイツで—

京都支部チェロ科 加藤 和代

十月二十日、十人の子供たちの大き
な期待と不安のをせ、ルフトハンザ航

空機は成田を発ちました。しかし、ホ
ントのことを言えば、この日を迎える
までが大変。少なくとも我が家におい
ては毎日が戦いの連続。決して意気
揚々とか順風満帆といったものではあ
りませんでした。

そもそも、日々のレッスン時間をい
かにして短くするかばかりを思案して
いる「お稽古嫌い」の娘に、「ドイツ
でのコンサート」という大役が回つて
きてしまったのですから、保護者とし
てはすぐに、それまでの練習態度を一
から変えてもらわなければならぬと
考えました。とはいえ、どれだけ口を
酸っぱくして説いてみても、娘には馬
耳東風。こちらが期待するように、
なかなか変わってくれませんでした。
それどころか、親が注意すればするほ
ど、音を理解しようとする娘の心も
曇っていくように見えました。

そんなある日、ドイツの演奏会では
ソロに加え、ベートーヴェンのピア
ノ・トリオの演奏もあることが分か

ました。実は、このトリオの練習が、

それまでの姿勢を見直す大きな契機と
なりました。ピアノ・ヴァイオリン・
チェロの三台が、それぞれ「美しい
音」を出さなければ、全体としてまと
まったトリオにはならないからです。

初顔合わせのメンバー（ピアノ・
ヴァイオリン）との信頼関係も一朝一
夕に出来上がるものではなく、時間を
必要としました。それでもトリオメン
バーの屈託のない生来の明るさや暖か
さ、ご指導くださった諸先生の適切な
励ましにより、リハーサル回を重ね
るごとに「みんなと心を合わせて音を
出さねば」と、それまでのわがまま
な娘には見られなかった意識が芽生え
たようです。「美しい音を 美しい心
を」は、鈴木鎮一先生の座右の銘だそ
うですが、正にその通り。トリオを通
して「心」の大切さを学んだ気がいた
します。もちろん「心」だけでは駄目
で、それに見合うだけの一層の練習を
つまなければならぬのは言うまでも

ありませんでしたが…。

幸い、ドイツの二回の演奏会も無事
終了し、子どもたちは多くの方々から
お誉めの言葉をいただきました。私は
フランクフルトからホーフまでの田園
風景を思い出していました。十月下旬
のドイツは田畑の収穫を終えたばかり
で、紅葉する木々に美しく彩られた
堂々とした風景でした。一方、私の目
の前には、別の大きな収穫をえた十人
の子どもたちがおりました。「ブラ
ボー」という掛け声と割れんばかりの
拍手をいただいた子供たち。実にはれ
ばれとした表情で、その充実感をかみ
しめていました。子どもたちが一人ひ
とり大切に育ててきたものが確実に稔
り、それがまた新たな種子となって、
さらに大きな収穫につながっていくこ
とを期待したいと思います。

最後になりましたが、暖かく見守り
ながらご指導くださいました豊田先生
始め、諸先生方に心より御礼申し上げ
ます。

ドイツの聴衆の思い

中野支部ヴァイオリン科・9歳

日置 駿

十月二十日から一週間、僕はドイツ
に演奏旅行に行ってきた。

この一週間は色々な事があつてとて
もいそがしかったけど、とにかくとて
も楽しくて、帰りの飛行機の中は悲し
くて仕方なかった。豊田先生と合奏の
勉強をしたり、友達のおけいこしてい
る姿を見たりして多くの事を学んだ
し、ドイツの美しい景色を見たり美味
しい食事を食べたりして、楽しい経験
もたくさんしたが、なんと言っても僕
にとって最高の思い出は、ホーフの演
奏会で沢山のあたたかい拍手をもらっ
た事だ。

あの日、演奏会の始まる前、僕はと
てもドキドキしていたが、前の夜にク
ライスラーが僕の夢の中に出てきて、

「明日は私も聞きに行くから頑張るなさい」

と言ってくれたのを思い出して、せいっぱい僕のクライスラーを弾いてドイツ人を驚かせようと思った。(筆者注・夢の中では、もちろんクライスラーも日本語を話す。)

「ゆうれいでもいいから本当にクライスラーが来ていないかなあ」

なんて思ってた舞台から客席をながめたら、ドイツ人のお客さんの顔がみんなクライスラーに見えてきてしまった。何百人ものクライスラーの前で演奏するのは、とてもきん張したが、曲が始まると周りが何も見えなくなった。

次に僕が気が付いたのは、沢山の「ブラボー」の声だった。まるで世界一高い山のとっぺんに一人で立っていて、まわりの山々から、こだまが聞こえてくるように「ブラボー」が何回も聞こえて耳が熱くなった。

次の日の朝食の時、豊田先生に、「この曲は本当に君にぴったりの曲だ

ね」

と言ってもらえた事も、とても嬉しかった。

僕は、このコンサートを一生忘れられないだろう。今でもまだあの拍手が聞こえてきそうな気がする。また、沢山の人の僕の演奏を聞いてほしい。



市長主催の昼食会(ホーフ)

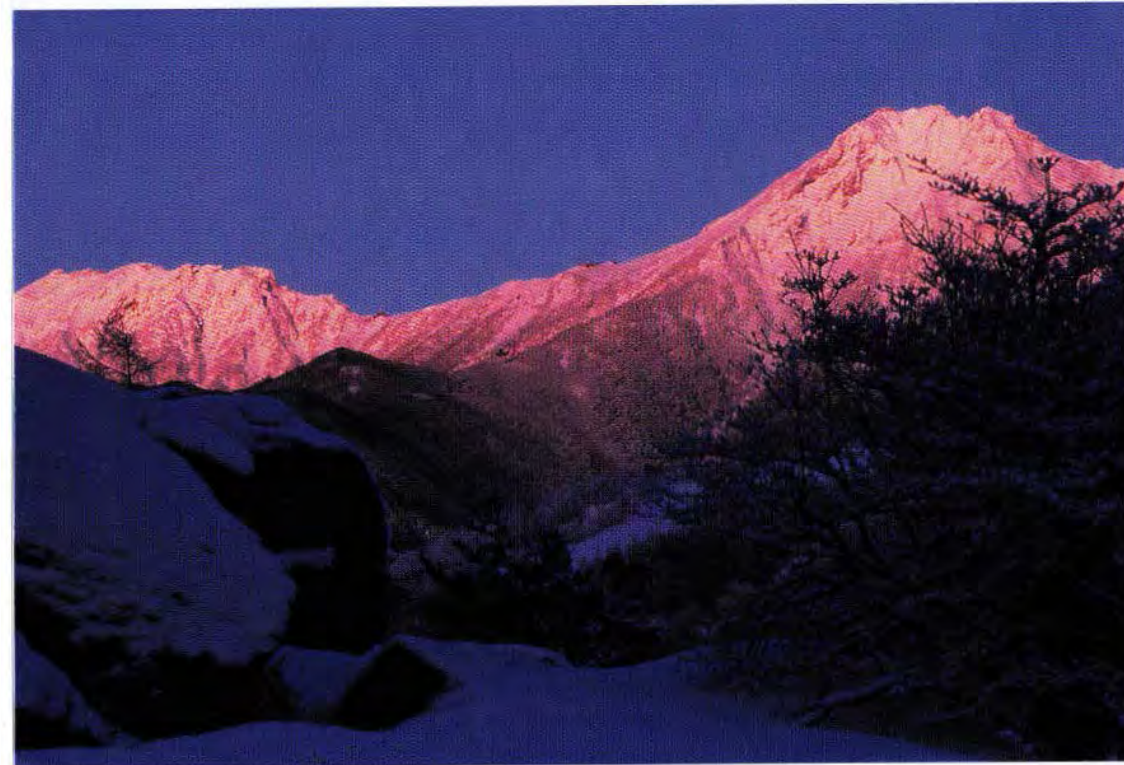
つかは世界中の人に聞かせたい。この旅行を通して、僕はどうして自分がバイオリンを弾くのか、初めて分かった。僕は人に聞いてもらうのが好きなのだ。毎日の練習は、つらい時もある。でもバイオリンは弾きたい。練習しないと自分が出したいような音は絶対に出ない。だから練習する。そうするとだんだん上手になって楽しくなるから、ますます人に聞いてもらいたくなるのだ。

ドイツ演奏旅行は僕にとって最高の思い出になった。僕を連れて行ってくれた豊田先生、他の先生方、いつもバイオリンを教えてくれる渋谷先生、お母さん、お留守番をしてくれたお父さんとお姉ちゃん、一緒にドイツに行った九人のお友達・上級生、みんなのおかげだ。どうも、ありがとうございます。

(次頁に、プログラムとツアー参加者名を掲載致します)

才能教育

Suzuki Method



目次

才能教育 143号

直感への教育と教育センス	鈴木 鎮一	6
思うがままに(22)	豊田 耕児	12

追悼 高円宮憲仁親王殿下	豊田 耕児	14
お子様方のレッスンを通して	鈴木 祐子	15
スズキ・メソードの発展を応援して下さった皆様	寺田 義彦	16
グランドコンサートのお知らせ	佐藤 満	18

スズキ・チルドレンのドイツ・ツアー	中嶋 嶺雄	20
子供と音楽／ベルリン国際シンポジウムに出席して	末広 悦子	24
心温まる感動的な旅	加藤 和代	28
美しい音を美しい心を	日置 駿	29
ドイツの最高の思い出	杉山 実	32

九州で初めてのチエロ全国大会

グラビア

チエロ全国大会／スズキデー記念コンサート